

驚きと観察の視点 渋沢栄一・杉浦譲『航西日記』

四十年前、筑波科学博のため万博関連資料を集めた。近代産業革命の華、第一回ロンドン万博(1851年)、日本が初参加したものの金融恐慌で盛り上がりに欠けたヴィーン万博(1862年)、現在の万博基礎を作ったパリ万博(1867年)と続く。パリは以後も、エッフェル塔完成の1889年、二十世紀を預言した1900年と大規模万博をリードしてきた。今回のパリ五輪でも競技内容はともかく、演出は中央集権国家らしさを遺憾なく誇示していた。(菊地実)

書誌・筆者

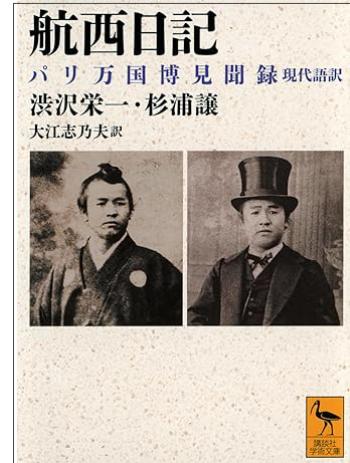
本書は新一万円札に登場した渋沢栄一(1840-1931)の1867年「パリ万国博見聞録」。訪欧中に幕府瓦解し、急遽帰国した。すでに開国十年以上経ち、外交交渉・貿易を通じて西洋事情や製品は怒涛のように押し寄せってきた。メキシコ銀貨を基準とした貿易は国内経済を大きく揺るがしていた。実際に博覧会を中心に欧州を広く見聞したことは、その後の渋沢にとってかけがえのない体験となった。なを本書は、前半は郵便切手を紹介し近代郵便制度確立に寄与した杉浦譲(1835-1877)の日記、後半は渋沢栄一の日記をもとにしていることが近年の研究から明らかになった*1。本書は近代史研究で知られる茨城大学大江志乃夫教授(1928-2009)の現代語訳解説を現資料としている。

- 初版本『航西日記』1871(明治4)年／著者・青淵漁夫＝渋沢、霞山樵者＝杉浦。江戸人らしく素敵な雅号。
- 筑摩書房『世界ノンフィクション全集14』(1961年、大江志乃夫編集)所収の『航西日記』を増補・文庫化
- 講談社学術文庫、2024年3月発行

マルセイユまでの旅

幕末から明治初期に日本を来訪・海外渡航したといつても十年で大きな差異がある。露日交渉に当たったチャーチン提督一行を描いたゴンチャロフは、帆船で長崎に来訪した。わずか十数年後、外輪船とはいえ蒸気船でマルセイユへの旅をスタートさせている。

「四杯の黒船に今日も眠れず」と言ってもせいぜい二千トンを超える程度のヨレヨレのフリゲート艦だが、千石船(百から百五十トン)しか知らなかった江戸人にとって



〈講談社学術文庫〉

て、それは驚き以外の何物でもなかった。訪欧使節は最後の将軍徳川慶喜名代として、弟の水戸家・徳川昭武(徳川慶喜)の随員として渋沢一行は西欧に渡った。

蒸気船で便利になったとはいえ、わずか千五百～三千トン船で揺れながら合計三十七日間の旅は大変であった。折々宿泊し、港町を眺め、多彩な人文物に接し、日本との対比を感じた。現代の十万トンを超えるエンタメ豪華クルーズ船やわずか十時間のヒコーキ旅とは全く異なる。

「揚子江河口は非常に広く…風や波は大洋と変わらない」(9頁)と書きながら、隋唐佳話を引用するのは漢文で鍛えられた江戸人らしい。「欧人が土着民を使役する様は牛馬を駆使するに異ならず、棍棒を使って」(16頁)と、尊敬してきた中国の有様に複雑な気持ちを吐露。次に訪れた香港では、一漁港だった都市が英國領となり「山を開き、海を埋め、石段を築き、」(17頁)「流通は金融を発達させ、運輸を自由にし、利益をもっぱらには」と

資本主義本質を見抜いている(19頁)。

「東洋への野心を示すシンガポール」ではコインを投げると海中に潜る少年がいて、「江ノ島と似ている、世態人情は変わらない」(26頁)という観察も面白い。

コロンボは「椰子、バナナの実、オレンジ、橘、肉桂、サトウキビが良いとしカレイが名物」(27頁)。またコロンボでは上陸して釈迦涅槃像(陶製)を見に行き、特産品の宝石・真珠・サンゴ・泡玉を紹介している。「南洋」アデンでは「痩せた土地の民は勤勉で剛健。事があればすぐに武器を取って立つ。富国強兵の基礎」と某国(ここでは清を連想)を比較している(31頁)。

貴重なのは丁度、工事中のスエズ運河を鉄道で通過したこと。「西洋人が事業を起こすのは…多くは全国全集の大益を図る」(35頁)と評価している。帝国主義とはいえ、スエズ運河が今まで果たした役割の大きさはその通りであろう。

軍事訓練の見学

マルセイユに着いてから各国を訪問するが、軍事訓練見学が多く十九世紀後半らしい。「歩兵三連隊、騎兵八小隊、砲兵一座の散兵訓練と勲章授与式」を見ている。なをマルセイユで撮られた使節団一行写真(41頁)は面白い。中央の小柄な徳川昭武以下水戸藩士は丁髷袴姿。多くの随員は散切り頭で服装は袴。右側の通役は日本と因縁浅からぬシーボルト息子。

織物の街・リヨンを経て4月11日パリ着。14日夕方「海魚などが遊泳するのを横から見る畜場…大変珍しい」(43頁、水族館の事)と、表現が面白い。4月20日にナポレオン一世の墓に詣で、4月28日にナポレオン三世と謁見式を行う。以下、夜の祝賀宴での軽気球観望や皇帝主催観劇・舞踏会(5月3日)が記されている。「舞踏たるや妙齡の美しい踊り子五、六十人が裾の短い美しきらびやかな衣装を着て…たおやかで柔軟で軽快の極み」(48頁)と絶賛し、同時に舞台景勝や照明にも「驚嘆」している。

凱旋門でパリを見下ろし、チュイルリー宮・コンコルド広場・地下水道と見学は続く。「人体の筋骨のような鉄製水道管やガス管に「驚嘆の到り」(80頁)、さらにパノラマで見た伊澳戦争の有様を「真に迫る」としている。

万博を見る

6月20日ミュラ公主(ナポレオン一世姪)の誘いで、万博視察。「欧州各国ともに人口の精緻と学芸の新しさの

先鞭を競っている…アメリカから出品した工作機械・紡績機械は特に優秀。英國はこれに次ぐ」(71-72頁)と、アメリカ工業の優秀さに触れている。「服飾や贅沢品はパリ…絹布織物はリヨンで花紋の聖地華麗…」(75頁)と各国特色を比較している。この万博は幕府以外に薩摩・肥前の三者が出品している。日本館評判について7月18日新聞記事^{*2}を紹介。「磁器、玻璃(ガラス)、人形、蒔絵、漆器…さらにキセルにも珍しいものがある」(92-94頁要約)と工芸品を大絶賛、手品などの曲芸も紹介。中でも「独楽の技…や扇や刀の上を渡らせる技」(93-94頁)に驚嘆し、絶賛！。

欧州を巡覧

万博見学後、欧州巡覧。9月3日スイスに向かう途中、トロワでシャンパンを「一杯試みた…その名声は嘘ではなかった」(108頁)。スイスでは大統領に謁見、農兵の訓練を「勇敢」と常備軍以上に評価、またユングフラウの絶景を称している。ついでオランダでは議事堂での大礼典に招待。アムステルダム近くで蒸気ポンプによる湖沼汲み上げを視察。ベルギーでは八箇所の要塞と職人一人の大製鉄所を見学。10月5日にはベルギー国王レオポルド2世の案内で演習を見学。鉄道でアルプス(サンミゼール)越え、馬車を6回乗り継いで^{*3}イタリアに向かった。当時ローマ法王庁と紛争がありイタリア統一直前だったフローレンス・ミラノ・ピサを巡歴、マルタを経て12月2日パリ着。

12月2日激浪の中、ドーバーを渡り訪英。議事堂見学の後、12月4日午後女王に拝謁し、茶菓のもてなしを受けた。翌日はタイムスという新聞社を見学。「印刷は実に精密であって、文体もまた平易である。一日に四十人で二時間に十四万枚の紙数を印刷…」(146頁)と紹介している。さらに武器貯蔵庫、大砲魚雷を使った海戦訓練もさることながら、大英銀行(バンク・オブ・イングランド)の機械による貨幣製造に目を見張っている。

ものすごく派手な帝政仏の大歓迎行事と、地味な英國の対比が実に面白い。今回紹介記事だけでなく、幕府崩壊で英国留学生とともに帰国時のエピソードなどいろいろあるが、幕府公式使節謁見は貴重な記録に満ちている。

*1:渋沢資料館学芸員・関根仁氏研究

*2:『フロルヘラリト』なお日本の独楽芸の見事さに関しては来訪した訪日録でも取り上げられている。

*3:まだ鉄道が未通だった